夏の秘密　目次

第一章　死体のあるプール　11
第二章　空を飛ぶ死体　29
第三章　灰色の容疑者　55
第四章　死者の招待席　73
第五章　死者からの絵ハガキ　89

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第六章　親子推理劇　110
第七章　鬼撫鬼島潜入　129
第八章　死者殺人事件　152
第九章　切れた絆　172

KADOKAWA NOVELS

國盜深謀

小林久三

カドカワ ノベルス

昭和五十七年九月一日初版発行

著　者　小林久三（こばやしきゅうぞう）

発行者　角川春樹

夏の秘密（なつのひみつ）

印刷所　旭印刷株式会社

製本所　本間製本株式会社

装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―一三　振替東京三―一九五二〇八

電話東京二六五―七二一一大代表　〒一〇二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

0293-771502-0946(0)

カバー・本文写真提供　松竹映画

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　死体のあるプール

1

更衣室で水着に着がえた真山（まやま）ちえみは、プールに向って走り出した。

登校二時間前とあって、校庭にはだれもいない。校庭には朝靄（あさもや）が漂っていて、校舎は淡いパステルカラーのなかに沈んでいる。

走りながら、ちえみは、

「ワン・ツー・ワン・ツー」

と掛け声をあげながら、両手を上下に突き出すようにした。その合い間に、両手の手首をぶるぶるっとふった。

水に入る前の準備体操のつもりだった。プールについたら、いきなり水のなかに飛びこみたい。プールについてから、準備体操をするのではまだるっこしい。時間がもったいない。

とにかく泳ぎたいのだ。べつに水泳部の選手となって、高校水泳選手権に出場するつもりではない。水のなかを、ミズスマシかなにかのように自由に泳ぎまわることが好きなのだ。

とりわけ、朝早く、ひとりで泳ぐことが大好きだった。二十五メートルプールを独占し、水のなかに体を浮べる。そのとき、自分の体が透明な青い水に染まる。澄んだ青い水は、体のなかにまで沁み透ってきて、心のなかにたまった嫌なことや憂鬱（ゆううつ）さまでを、きれいさっぱり洗い流してくれるようにおもえる。

そのとき、気分がスカッとして、大声でなにかを叫びたくなってくる。その瞬間が、たまらなく好きなのだ。毎朝、二時間早く登校して、授業前にプールでひとりで泳ぐのは、宇宙飛行士が無重力の空間を泳ぐにも似た、軽やかなその瞬間をもとめているからだといえるかもしれない。私立甲城学園高校三年、真山ちえ

み、十七歳。

プールのそばまで走ってきた。

プールは校庭より一段高くなったところにつくられている。プールの横についた階段を登ろうとしたとき、ちえみは、一瞬、口をふくらませた。

コンクリートの白い階段に、血のようなものが点々と落ちているような気がしたのだ。その血は、階段を伝わって、プールのほうまでつづいているようにおもえる。

「血……！」

小さく呟いて、ちえみは、まさかと、すぐにその不安を打ち消した。血にみえたのは、油のしみかなにかだろう。

一気に階段を駆けあがって、プールに出た。

準備体操は、走りながらすませている。あとは、飛びこむ前に胸を水で濡らせばいい。そのことは、体育担当の倉原先生や水泳部コーチの桜林俊子先生から、くどいほど念を押されている。いきなりプールに入るのは、心臓麻痺の原因になって、ショック死するぞ、と。

プール・サイドに立って、ちえみは両手を横にあげ、胸を大きく張って、深呼吸をした。つづいて、手首をふるわせ、次に足首をつかんで軽く揉みながら、プールの水をちらと眺めたとき、彼女はおや、と首をかしげた。

朝靄を鋭く切り裂いて射しこんでくる光が、プールの上半分を染めている。その照り返しを映して、プールは不思議な明るさを浮べている。あるかなしかの風が吹きぬけると、水面は青い空と、照り返しの朱をたたんで、微妙に乱れ、華やいだ。

水面に赤いものが混じっているようにみえたのだ。なんとなく、いつもの水の色とはちがっているようにみえる。

〈光のせいで、そうみえるのよ〉

そう、自分にいいきかせると、ちえみはプールのはじにしゃがみこみ、手を水面にたらし、水を掬いとろうとした。掬いとった水で胸を濡らそうとしたのだ。

そのとき、ちえみの顔が、激しい恐怖に引きつって

歪(ゆが)んだ。水面にのばした指の先に、うつ伏せになって浮んでいる男の姿をみたのだ。

男の体は、プールのヘリにへばりつくようにして、流木のように漂っている。その周囲の水は、淡紅色に彩(いろど)られている。

「し、死体だあ！」

ちえみは、悲鳴に似た鋭い叫び声をあげた。

その声は、広い校庭に吸いこまれていき、やがて校舎のあたりでにぶくこだました。

うつ伏せになって水に浮んだ男の顔は、わからない。けれど、男の姿には見覚えがあった。

男の体は、プールの壁にあたったのか、弾(はじ)かれたようについと中央のほうに流れだした。

反射的に、ちえみは両手で顔を覆った。

全身に鳥肌がたった。体の芯(しん)が、氷柱に変わったかのようにさむけがした。足がすくんで、動けない。

ちえみは、しかし、顔を覆った両手の指の間から、改めてプールに浮んだ男をみつめた。恐いものみたさからだったが、それ以上に、見覚えのある男は、だれなのか。そのことを知りたいというおもいから、そうしたのだった。

男はぴくりとも動かない。

顔を水につけたまま、漂っている。

流木と同じだった。

流木とちがっているのは、男の体が航跡のように赤い尾をひいて漂っていることだ。赤い航跡は、血だと判断して、まちがいないだろう。

死体の男の髪が短いことに気づいた。

体つきからみても、十代の男性ではない。二十代、それも二十代半ばから三十前後のようにみえる。

〈ひょっとすると――〉

ちえみは、記憶をたどった。揺曳(ようえい)する記憶のなかに、男の姿は溶けた。彼女は、もしかすると、とおもった自分のカンが的中したことを知った。

「倉原先生……！」

ちえみは、声をあげた。

死体は、ちえみのクラス担当の倉原先生、倉原信太郎(しんたろう)先生だとおもった。若くて、スマートで、おまけに

独身ということも手伝って、女子生徒の憧れの的の先生だ。体育担当だけれども、それ以外に三年A組のクラスを受けもち、生徒の生活指導を受けもっている。

たしか、倉原先生は校内の教職員寮に住んでいるはずだわと、ちえみはおもった。

〈その先生が、なぜ、プールのなかで死体に？〉

死体は、半袖を着て、スラックスをはいている。プールに泳ぎにきて、殺されたのではないことは明らかだった。プールの階段に、血が点々としたたっているところからみて、倉原先生はどこかで怪我をしてプールにたどりつき、水のなかに落ちて死んだのだろう。

〈いずれにしろ倉原先生が死んでいる……〉

早く、だれかに知らせなければと、ちえみは焦った。心はしきりにせくのだけれども、体がおもうように動かない。

プール・サイドで、ちえみは両手で胸を抱きしめるようにして、棒のように突っ立っていた。

寒くもないのに、体がこきざみにふるえる。

あたりをみまわしても、人影はない。

そのことが、いっそう不安をつのらせた。

〈助けて！〉

と、悲鳴をあげようとしたが、喉にビー玉かなにかが詰ったようで声がでない。

勇気をふるい起して、ちえみはプールを離れ、水着姿のまま校庭を斜めに横切ると、用務員の部屋に向って走り出した。水着姿だということは、まるで念頭になかった。無我夢中で走りながら、夢のなかで追いかけられ、どうしても足が動かずに早く逃げられないもどかしさのような感覚を、彼女は味わっていた。

2

私立甲城学園高校は、横浜の北西のはずれの丘陵にあった。多摩丘陵を切りひらいて、つくったのだが、学園のまわりは、もとの緑をそっくりそのまま残している。遠くからみると、校舎はすっぽりと緑のなかに埋もれて、森のようにしかみえない。

田園都市線のたまプラーザ駅前からバスにのって十

分、甲城学園前でバスを降りて、ゆるい傾斜の坂道を五分ほどのぼったところに正門がある。

ふだんは静かで、小鳥の声だけがのどかにきこえてくるだけなのだが、今日の学園は騒然としていた。ひっきりなしに、警察の車や新聞、テレビの車が出入りしている。

死体の発見された校庭の東南の隅にあるプールのまわりには、立ち入り禁止のロープが張りめぐらされ、捜査員や鑑識課の課員たちが、プールのまわりにひしめき合っている。

朝の八時近くに登校してきた生徒たちは、ものものしいパトカーや警察の車に驚き、プールのそばに群らがったけれども、授業開始のベルがいつもより十分早く鳴らされるとともに汐がひくように教室にもどった。

なかには、いつまでもプールのまわりから離れようとしない生徒たちもかなりいたが、生徒たちはすぐに引きあげるようにという校内放送が再三にわたって行なわれ、いつかプールのまわりから生徒たちの影は消えた。

生徒に人気のある倉原先生が死体になって、プールに浮んでいたという噂は、あっというまに全校にひろがっていた。噂には尾ヒレがついて、倉原先生は全身に無数の刺し傷を負って血だらけになって水のなかに浮いていたとか、そうではなく、ロープで手足をぐるぐる巻いて水中に投げこまれていたという話を、生徒たちは興奮した口調で、口ぐちに語り合った。ひどいのになると、プールが血の海になっていたとか、倉原先生は全裸で浮いていたといった無責任きわまる話が、飛び交った。

倉原先生が殺されたことは、ほぼ明らかだった。プールに飛びこんで自殺するものはいない。まして体育担当の教師なのだ。水泳は、むろん上手である。また、水の張ったプールで事故死するとは考えられない。

それに加えて——

体育館の脇には、倉原先生の車が置き去りにされていることがわかって、他殺説の容疑はさらに濃いものになった。というのは、その車のバンパーが、滅茶苦茶に潰れているうえに、車扉にもかなりひどい損傷が

あつた。二つのヘッドライトも、こなごなに砕けている。

倉原先生が酔っ払い運転をして、自分の車を校庭を取り囲むコンクリートの壁にぶつけたとは考えられなかった。先生の車は、べつの車に何度もぶつけられて大破し、運転席の先生は重傷を負った。そのことを物語るように、校庭には、二台の車が追いつ、追われつのデッド・ヒートを演じたことを示すタイヤ痕が、あちこちに残されていた。

おそらく倉原先生が運転する車は、べつの車に執拗に追われ、何度もぶつけられるうちに大破した。それとともに先生は、重傷を負って動けなくなった。

それを見定めた犯人の車は逃走した。

そのあと、必死に車から外に出た倉原先生は、助けをもとめて、ふらふらっと歩き出した。なぜプールに向ったのか、そのへんは謎だけれども、おそらく意識を半ば失った状態で方向感覚を失っていたものと推測された。そして、プールにたどりついたとき、意識を完全に失って水のなかに落ちた。

それが、冷静な判断力をもっている生徒たちの推理だったが、その推理に満足しない生徒たちは、勝手にあれこれ想像をまじえて、水のなかに丸裸にされて浮いていたとか、体には無数の刺し傷があったとか、刺激のつよい話をつくりあげていったのである。

いずれにせよ、倉原先生が殺されたことは、ほぼ確かなようだった。三年A組の真山ちえみが死体を発見した時間からみて、事件があったのは深夜から早朝にかけての間、校庭で車による殺人事件が発生したのだ。おまけに被害者は、三年A組の、若い、独身の先生だった。

生徒たちの噂は、次に犯人をめぐっての推理に走っていった。

「犯人は、倉原先生に恨みをもっている暴走族の生徒よ、それにきまってるわ」

「そうかな。先生が、そんな暴走族の呼び出しにOKするとはおもえないな」

「犯人は、町の大人よ。倉原先生って、若くてハンサムじゃない。先生に女をとられて頭にきた若い男が、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com